

さくらの生命を振り絞るような絶唱に、愛の、サキの、純子の、ゆうぎりの、そしてリリーの歌声が重なりあつて会場中に響き渡る。さくらが発した「ヨミガエレ」の想いは、愛が受け止め、サキが背を押し、純子が紡ぎ、ゆうぎりが奏でて、リリーが弾けさせた。

伝説となつたアルピノライブ。

彼女たちの想いは五百人の観客に、きつと正しく伝わった。

五百人の心を——もろともに震わせた。

彼らはきつと語り継ぐだろう。

崩壊したステージで、照明も音楽も停止した暗闇の中で、「何度でも!」「何度でも!」と叫び続けた彼女たちのことを。そしてこの場に立ち会えた奇跡を。今はたったの五百人かもしれない。だが彼女たちの歌はいずれ佐賀へ、日本へ、そして世界へ響き渡るといふ『確信』を。

伝説は現在進行形で紡がれている。

彼女たちのライブの様子は動画配信で、SNSで、それこそ地球の全てを稲妻のように駆け抜けている。その中には否定的もしくは懐疑的な意見も当然のように含まれているが、疑えば疑うほど自分の目で確かめずにはいられないのが人の性だ。

だからこそ——フランシシュの真価が問われるのは『次』である。

一夜限りの奇跡に過ぎぬのか。

語り継がれる伝説の軌跡となるのか。

これまで以上に注目が集まるフランシユシユの次なる一手は――

S

「あたまかっぴかびになつとう……」

世間の注目なぞつゆ知らず、目覚めたさくらはげんなりと溜息を吐いた。

昨日のアルピノライブが終わってから、ずっとたえに頭を噛まれたままだったのだ。痛覚がないのでいくら噛まれても構わないのだが、よだれでかっぴかびになった髪は女子的にかなりきついものがある。ライブ後に水浴びはしたものの、どうやら寝ている間もたえに頭を齧られていたらしい。

「よう、さくら。朝からシケたツラしとんなあ」

「あ、おはようサキちゃん。珍しかね、こんなはよう起きとーとか」

サキは「にへへ」と笑いつつ、足で布団を畳んでいる。

「つか、ろくに眠れんかったわ。昨日のライブ思い出すと……こう、な？」

「あー……」

そういえばさくらも布団に入るまで「こんな興奮して眠れるわけないやーん！」と思っていたのだ。なのに気が付くと朝だったわけで自分の図太さにちよつと呆れてしまう。

「他のヤツラも同じみてーだな。お前とたえ以外はみんな起きとーぞ」

「え!？」

慌てて周囲を見渡すと、確かにさくらとサキ以外誰の姿もない。布団もすでに片付けられており、取り残された感が半端ない。

「あれ？ たえちゃんとは？ たえちゃんまだ寝とーって」

「は？ なーん言いよつとか？ またボケとつとか？」

「え？」

サキが呆れたように首を振るのを見て、さくらは急に不安を感じた。

なにしろここしばらく記憶を失ったり取り戻したりと、自分の記憶に対する信頼が根底からグラついているのだ。また自分は何かを忘れているのだろうか？と狼狽していると、

「たえなら昨日からお前の頭に齧り付いとーまんまやん」

「はあ!？」

慌てて頭の後ろに手を回すとなんかもさもさぶにぶにした感触がある。

ぶにぶにの方をつまむと「ヴァー」とくぐもつた声が出た。

「なんで!? なんで私これに気付かんと!? てか気付いた今でも違和感とか全然ないっちゃけどー!？」

「あー……一体化してんじゃね？ ゾンビやけん、そーゆーこともあるっちゃなかか？」

「知らんし！ てか融合するゾンビとか怖っ！ 素で怖いけんマジやめて！」

後頭部に両手を回してがっちり掴むと、「ごめん、たえちゃん！」と払い腰で思い切りブン投げる。背中から布団に叩き付けられたたえにちよつと罪悪感が湧いたが、生理的嫌悪感にはどうしても抗えなかった。

「うーわー、なんか頭に白いの見えとーぞ？ それ骨か？ ミソか？」

「は!? うそ!? うあ、ほんとにハゲとーやん!? これ治るよね!? 治るよね!」

「治るっちゃないと？ 知らんけど」

欠伸混じりで返すサキに頬を膨らませながら、さくらはできるだけハゲを隠そうと髪の毛を手櫛で直す。しかしよだれでかびかびの頭は如何ともしがたく、とりあえず頭を洗おうと外に足を向けた。

扉を開くと昨日の雪が嘘のように溶け、雲ひとつない晴れ間が広がっている。

ゾンビだから寒さは感じないが、風は春のように柔らかい。

「あー、よか天気やねえ」

なんとなく足取りも軽くなり、スキップしながら裏庭の水道にいつて頭を洗う。シャンプーなりリンスなりが欲しいところだが、備え付けのレモン石鹸も慣れればこれで悪くない。

顔と頭を洗い終わると、残っていた眠気もさっぱりした。

ハゲも……まあ、大丈夫だろう。

「よし！」

両手で頬を叩いてから、東の空を見上げる。

昇ってきた太陽がステージ上のスポットライトと重なり、熱い想いもよみがえる。ライブ前の不安とか恐怖も一緒に思い出せるのに、またやりたいという気持ちの方がさらに強い。なんだか無性に身体を動かしたくなつて、身に染み付いたステップを踊っていると「おら、さつさとミーティングいくぞー！」と横合いからサキの声がした。

「あ、ごめんサキちゃん！　すぐ行くけん！」

「つたく。遅れるとグラサンがまーたネチネチうるせーぞ」

「ごめんてー」

踊っているところを見られた気恥ずかしさで、照れ笑いを浮かべながらサキのところへ駆け寄る。「ほらよ」と投げられたタオルを受け取って頭を拭くと、着替えるために連れだつて部屋に戻った。

「サキちゃん寝とらんとやる？　大丈夫と？」

「ゾンビやけん、平気くさ。さくらだつてライブ前はずっと寝とらんかったろーが」

「あー……」

ライブ前——記憶を取り戻す前のことを思い出すと、穴を掘って埋まりたくなる。

とはいえサキを含めたメンバーにはすでに謝って許してもらった。

今さら改めて謝るのは許してくれたメンバーに対する裏切りのような気がする。「そうやっ  
たねえ」と言葉を濁して着替えるのに専念した。

「あ、そういえば……」

メンバーには謝った。

だが幸太郎にはまだ謝っていない。

昨日はライブが終わった後もバタバタしていて、幸太郎とはろくに顔も合わせられなかった  
のだ。散々迷惑をかけたし一度きちんと謝るべきだろう。そんな状況でなおさら遅刻など許さ  
れるはずもない。

「そうね、先に謝つとかんとね……うん、いこうサキちゃん、たえちゃん！」

「おう」

「あう」

サキとたえの返事を背に受け、着替えたさくらは部屋を飛び出す。

謝ると決めたものの、どんな顔で幸太郎に接すればいいか解らないままに。

§

「アイツならいいわよ」